

# 錬金術師センディヴォギウスの亡霊

栗原 成郎

センディヴォギウスという奇妙な名のポーランド人の錬金術師に興味をいだくようになったのは、渋澤龍彦の『黒魔術の手帖』(初版は桃源社 1961 年、後に河出文庫)に収められた「薔薇十字の象徴」という文章を読んだ時からである。渋澤の文章は、卑金属を金に変えるいわゆる「哲学者の石」(あるいは「賢者の石」)lapis philosophorum を所有しているスコットランド出身の錬金術師アレクサンダー・シートン Alexander Seton が、錬金術の秘密を訊き出そうとしたザクセン選帝侯クリスティアン II 世のために投獄され、拷問を受けていたのを、センディヴォギウスによって救出され、そのお礼に死ぬ前に「哲学の石」を命の恩人に譲り渡したところで終わっている。その話の前後を知りたくなったのである。

ヨーロッパに名を知られた錬金術師ミカエル・センディヴォギウス Michael Sendivogius は、16 世紀後半から 17 世紀前半に数奇な運命の人生を送ったミハウ・センヂヴィ Michal Sędziwój というポーランド人で、1566 年にポーランド南部山岳地の町ノヴィ・ソッチ Novi Sącz (現マウオポルスカ県)近郷のウコヴィツァ Łukowica に由緒ある貴族の息子として生まれた。幼年期のことはほとんど知られていないが、神童の誉れ高く、成人前にクラクフのアカデミーに入学。当時のクラクフ大学では、多くのヨーロッパの大学と同じように、錬金術が非公式ながら科学の一部門として研究されていた。センヂヴィはこの分野に興味をもち、化学の研究に励んだ。

彼の才能は大貴族で有力な政治家ミコワイ・ヴォルスキ Mikołaj Wolski (1553-1630) の目に留まり、自身も錬金術の研究家だったヴォルスキは彼の研究を支援した。1588 年ころ彼はヨーロッパ遊学の旅に出る。その費用は、プラハに居城をもつ神聖ローマ皇帝ルドルフ II 世(在位 1576-1612)の宮廷とつながるヴォルスキの援助によったと思われる。ヨーロッパ遊学中、センヂヴィは当時一流と言われた錬金術師たち—ジョン・ディー John Dee (1528-1608)、エドワード・ケリー Edward Kelley (1555-95)ら—を歴訪し、彼らから知識を汲み取り、化学的処理法のレシピや手稿を買い取った。彼はライプツィヒ、ウィーン、アルトドルフの諸大学でも学んだ。

センヂヴィの生涯に起こったミステリアスな挿話として、渋澤が紹介しているのが錬金術師アレクサンダー・シートンとの出会いである。シートンは、錬金

術を疑問視するフライブルク大学教授のヴォルフガング・ディーンハイムとバーゼル大学医学教授ツウインガーの面前で、るつぽに鉛と硫黄を入れて炉の火にかけて熱し、そこに少量の粉末を入れて鉛と硫黄の溶液を純金に変えて見せ、卑金属を金に変成させる秘密を知っているとして、ザクセン選帝侯クリスティアン II 世によって捕らえられていた。選帝侯は「哲学者の石」製造の秘法について口を割らせようと、シートンを鉄の串で刺す、焼き鑊(こて)を当てるなど、むごたらしい拷問にかけた。センヂヴィはアルトドルフで勉学中にシートンの知遇を得たようで、彼の苦境を知って選帝侯の都ドレスデンに赴き、その出獄の手助けをした。センヂヴィがどのような方法で彼を救出したかは伝えられていないが、おそらく、自分の後ろ楯であるヴォルスキや皇帝の力を借りたのであろう。シートンは救出に感謝し、センヂヴィに「哲学者の石」と思える粉末を1オンス贈ったという。その後まもなくシートンは拘禁と拷問が原因で衰弱死した。伝説によれば、センヂヴィは彼の若い未亡人ヴェロニカと結婚した。

その後、センヂヴィはルドルフ II 世の招聘に応じてボヘミアに赴き、プラハ城内でシートンから譲られた粉末を用いて実験を行ない、錬金術の賞賛者である皇帝を納得させるに十分な成果を見せた。そのことは、皇帝が《Faciatur hoc quispiam alius, quod fecit Sendivogius Polonus》(ポーランド人センディヴォギウスが為したることを他の者も為さんことを)というラテン語の銘を刻んだ大理石板を王宮の壁に設置させたことから確からしい。センヂヴィが用いたシートン秘伝の魔法の粉末は、金メッキを可能にする一種の化合物であったかもしれない。センヂヴィは 1590 年代から 1600 年代初めに皇帝の庇護のもとにプラハで活動し、ほぼ同時期にポーランド王ズィグムント III 世 Zygmunt III Waza (在位 1587-1632) の宮廷にも出入りした。

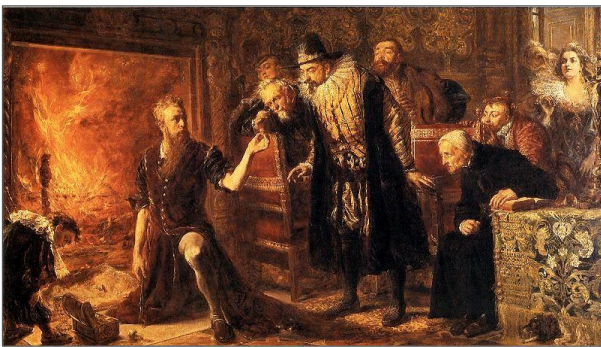
1605 年センヂヴィはヴェルテンベルク Württemberg 公フリードリヒ I 世の招きでシュトゥットガルトに赴いた。公は錬金術に異常な関心を持ち、多くの錬金術師をか



ミハウ・センヂヴィ  
Łuszczkiewicz 画、  
1862

かえ、シートンもかつてその宮廷にいた。公のお気に入り  
の錬金術師ヨハン・ミュラー・フォン・ミュレンフェルス  
Johann Müller von Mühlenfels は、おそらく公と結託して  
センヂヴィイの秘密の粉末を手に入れるため陰謀を企てた。  
センヂヴィイは城の塔に幽閉され、彼の粉末を納めた箱を  
はじめ貴重な所有物はすべて没収された。センヂヴィイは  
(おそらく監禁者側の念入りな仕掛けにより)脱走して、  
自分の災難をルドルフ II 世とズィグムント III 世に訴えた。  
公はその圧力に屈し、陰謀の元凶ミュレンフェルスは  
裁判にかけられ絞首刑に処せられた。

これらの事件の後、センヂヴィイはポーランドに帰り、  
錬金術に異常な関心をもっていたズィグムント III 世の  
信頼を得て王室秘書官となり、錬金術の研究に専念した。  
ヤン・マテイコは、センヂヴィイが王の前で錬金術の技を  
示している場面を描いている。



錬金術師センヂヴィイ  
Jan Matejko (1838-93) 画、1867

しかし時とともに王との関係は冷えこみ、センヂヴィイ  
はヴォルスキから資金援助を得てその領地クシェピツェ  
Krzepice (チェンストホヴァの西北) に実験室を建設し  
錬金術の研究を続けた。金製造の成果は見られなかったが、  
彼の研究は中央ヨーロッパにおける冶金工業、化学工業の  
基盤を築くことになった。

その後センヂヴィイはポーランドを去り、神聖ローマ帝国  
の新帝フェルディナント II 世 (在位 1619-37) の顧問官  
となり、ウィーンとワルシャワとをつなぐ外交官的な働きを  
し、またシレジア (シロンスク) における皇室用の銅、鉛の  
採鉱場の建設を指導した。皇帝に尽くした政治的貢献により  
クルノフ公爵領に領地を下賜され、クラヴァジェ Kravaře  
(現在のチェコ共和国東端) に住み、1636 年そこで世を  
去った。

センヂヴィイはパテン師的な錬金術師ではなく、硝石が  
加熱される時に放出される酸素の存在に最初に気づいた  
化学者として評価されている。

当時の中欧の支配者たちはセンヂヴィイに金を創り出す  
夢を託したが、彼の故郷ポーランドのノヴィ・ソンの町民  
は、今も黄金出現の見果てぬ夢を見る。毎年、大晦日の  
深夜、大学教授の講義用ガウンに身をつつんだセンヂ  
ヴィイは、ノヴィ・ソンの旧市街を悠然と歩きながら自  
分のまわりに金貨を振りまく。地面に落ちる金貨の音は  
聞こえるが、錬金術師の姿は月夜にも影を落とさない。  
センヂヴィイの亡霊を見た人は幸運に恵まれた素晴らしい  
年を迎えるという。(くりはら しげお)

### “Grill”シーズン

近ごろポーランドでは、五月から夏の終わりにかけて“grill”  
をするのが流行っています。“Grill”は“バーベキュー”を意味する  
新しい外来語です。親しい者同士が庭に集まり、食べたり飲んだり  
しながら、暗くなるまで語り合います。私たちがイエズス会の神父  
さんたちから修道院の中庭での“grill”に招待されました。

w skwarze południa  
nad koszem z owocami  
latają osy

灼ける午後  
果実の籠に  
飛ぶ蜂や

ボズナン市、津田モニカ  
Monika Tsuda, Poznań

dźwiękami grzmotu  
deszczu i wiatru śpiewem  
gra nawałnica

かみ鳴りと  
風雨の歌で  
嵐奏(ひ)く

ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ  
Piotr Wrzeciono, Warszawa

年寄れば少し丁寧花を見る  
暗闇にをんな差し出す冷奴  
雁帰る人生軽みカルパッチョ

岩見沢市、霜田千代磨

